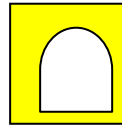


日吉台地下壕保存の会会報



第100号

日吉台地下壕保存の会

この度の東北地方太平洋沖地震に際し亡くなられた方々に心からご冥福をお祈りするとともに、被災された方々に心からお見舞いを申し上げます。

日吉台地下壕保存の会

平成22年度かながわボランティア活動奨励賞に輝く

運営委員 亀岡敦子

はじめに3月11日におきた東日本大震災で被災された皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。会員の皆さまのご家族やお知り合いのなかに、被災された方はおられませんでしょうか、お伺い申し上げます。

日吉台地下壕保存の会は「平成22年度かながわボランティア活動奨励賞」の受賞団体にえらばれ、3月18日に神奈川県庁の荘重な知事応接室で、新井副会長と私は防災服に身をつつんだ松沢知事から、賞状と副賞を頂きました。応募40団体のなかから選ばれた5団体はいずれも10年20年継続している団体で、



地域に根付いた活動実績をあげており、当会もその一員と認められたということです。当初の予定では、かながわ県民サポートセンターのホールで賑やかに表彰式がおこなわれ、会からも運営委員10人で出席するはずでしたが、東日本大震災被害のあまりの大きさに、マスコミもない、ささやかなそして温かな式典になりました。

日吉台地下壕保存の会の活動は、約350名の会員の皆さまが納めてくださる会費と、見学案内の際に頂く資料代によって、支えられています。

おかげで会報の発行、研究のための書籍の購入、戦跡保存全国ネットの一員としての対外的活動など、十分に行ってまいりました。それでもこの賞の副賞80万円は、なんとしても嬉しく、長年の懸案である会の紹介リーフレットや、ブックレット、冊子の増刷など、これから皆でじっくりと使い道を考えたいと思います。

目次

かながわボランティア活動奨励賞(亀岡敦子)	1p
お知らせ 総会・全国ネットシンポジウム	2~3p
報告 サイパン・テニアン旅行記(谷藤基夫)	3~4p
資料 房総半島の戦争遺跡を巡る(新井揆博)	5p~11p
寄稿 房総半島の戦跡を巡るに参加して(TA)	12p~13p
寄稿 南房総・館山の戦跡めぐりに思う(岡上そう)	13p~14p
連載 地下壕設備アレコレ(その2)(山田譲)	14p
お知らせ ガイド養成講座	15p
お知らせ 2011 平和のための戦争展 in 横浜	15p
活動の記録	16p

私たちのような活動は、時として独りよがりになっているのではないかと、たいして意味のないことに精力を使っているのではないかと、などと落ち込んでしまうときがありますし、生活のなかに占める割合が大きくなりすぎると、疲れることもあります。そんな時、20年間の活動は間違っていなかったことが改めて認められ、どんなに励まされたかしれません。6年前に神奈川新聞社から「第18回神奈川地域社会事業賞」を頂いたときも、勇気がわいてきて、グンと活動が加速したのを憶えています。この嬉しさをバネに、今夏の「第15回戦争遺跡全国シンポジウム神奈川県横浜大会」も大勢の力で、有意義な大会にしたいと思います。皆様のご参加とご協力、お願い申し上げます。

お知らせ**2011年度日吉台地下壕保存の会総会開催の御案内**

昨年の総会からはや1年近く、今年度の総会の御案内をさしあげる時期となりました。この間、日本は未曾有の大震災に見舞われ、多くの方々が被災し、犠牲となる事態となりました。日吉台地下壕も内部の安全確認等で見学会を延期せざるを得ませんでした。

しかし、現地では辛抱強く少しずつ復興への取り組みが始まっています。保存の会でも粛々とこれまでの取り組みを継続しようとしています。

今年は戦争遺跡保存全国ネットワークのシンポジウムが慶応義塾大学日吉キャンパスで行われます。これからの1年の取り組みを話し合う総会が下記の要領で行われます。会員の皆様、万障お繰り合わせの上のご出席をお待ちしております。

記

日時 2011年6月11日(土) 午後1:00～

会場 慶応義塾大学日吉キャンパス 藤山記念館大会議室

内容 講演 「福島原発事故をどう捉えるか」 (詳細は後ほどご連絡します)

お知らせ**第15回戦争遺跡保存全国シンポジウム****神奈川県横浜大会要項****大会テーマ『戦争遺跡を平和のための文化財に！』****1. 主催・後援**

【主催】戦争遺跡保存全国ネットワーク

第15回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県横浜大会実行委員会

【後援】神奈川県・神奈川県教育委員会・横浜市・横浜市教育委員会・

港北区・慶応義塾・神奈川新聞社・朝日新聞社・読売新聞社・

毎日新聞社

(すべて申請中)

2. 趣旨

2011年の戦争遺跡保存全国ネットワークの大会は、神奈川県横浜市日吉の慶応義塾大学で開催されます。日吉台にはアジア太平洋戦争末期に軍令第3部、連合艦隊司令部など海軍の中枢部が移転し、2600メートルに及ぶ大地下壕が掘られ、レイテ沖海戦や沖縄戦（特に戦艦大和の海上特攻など）を指令、本土決戦に向けて海軍総隊の司令部が設置されて作戦が立てられました。今でもその痕跡はいっぱい残っています。その遺跡の文化財としての保存を求

めて日吉台地下壕保存の会が長きにわたって活動してきました。そして川崎市の明治大学生田キャンパスに遺る陸軍登戸研究所の保存を求める会や蟹ヶ谷地下壕保存の会と一緒に毎年、『平和のための戦争展』を開催し、これらの戦争遺跡の保存を訴えてきました。

昨年、陸軍登戸研究所については明治大学が戦争中に生物・化学兵器を開発していた鉄筋の建物をそのまま保存し、明治大学平和教育登戸研究所資料館として開館し、既に1万人を超す参観者が訪れています。慶應義塾大学も自ら地下壕の調査をおこない、保存に向けた動きもはじめています。保存の会が案内する日吉台地下壕も年間約3千名が訪れています。

現在、文化庁が調査している戦争遺跡にも含まれるこうした遺跡が保存される動きは極めて重要であり、それぞれの大学や関係者に敬意を表したいと思います。同時にこうした遺跡は戦争の本質を考える上で極めて重要なもので地域の文化財として市民が積極的に関わって保存と活用をはかるべきものでもあります。

私たちはそうした立場から大会のテーマに『戦争遺跡を平和のための文化財に！』というスローガンを掲げました。全国の皆さんと一緒に平和のために戦争遺跡を保存し、活用する意義を深めると同時に資料館などを設置し平和教育を推進できる場を各地につくる運動を展開したいと思います。

3. 日程 2011年8月6日(土)～8日(月)

記念講演 澤地久枝 『戦時下の若者たち』

4. 場所 慶應義塾大学日吉キャンパス

5. 見学会 日吉台地下壕・登戸研究所・貝山地下壕・横須賀軍港など

(詳細は次号でお知らせします。)

報告

サイパン、テニアン旅行記(戦跡保存の視点から)

運営委員 谷藤基夫

昨年の暮れに「沖縄平和ネット関西の会」主催の6日間のサイパン・テニアン戦跡巡りのツアーに参加する機会を得た。

広がる水平線、まぶしい太陽、青い海、珊瑚礁、緑の木々、ジャングルの間に原色に近い赤や黄色の花々、サイパン・テニアンは正に南海の楽園である。しかし島の山腹に残る艦砲射撃の生々しい傷跡、古びたコンクリートのトーチカに無数の弾痕、波間に残された戦車の残骸、波に打たれ、海から突き出す錆びついた機関砲、万歳クリフ、シーサイドクリフに伝わる痛ましき人々の悲話、原爆を搭載した飛行場等々 サイパン・テニアンの戦争遺跡は、この地をただのリゾートの地にしてはならない、戦争遺跡を過去の遺物としてはならないということを強く思わせる場所であった。

更に私が戦跡保存の視点から痛感したことは、アメリカと比較した日本の戦跡調査・保存の立ち遅れである。サイパンの空港、アスリート飛行場(イズリー飛行場)に残された火薬庫、発電所など空港施設、空港全体についてアメリカはすでに1980年代の初めには「HOME OF THE SUPERFORT: An Historical And Archaeological survey of Isley Field; ミクロネシア考古学調査報告: 1982」として調査報告書を作成し、廉価で頒布している。更に飛行場内各ポイントには日本語と英語、写真付きで金属製の説明板が設置され、見学者に分かりやすく解説されている。

省みて日本の同時代の戦争遺跡、例えば日吉台地下壕は連合艦隊司令部や艦政本部などアジア太平洋戦争末期の海軍が実戦に使用し、戦艦大和の出撃や沖縄戦など、重要な作戦を立てた史跡であるにも関わらず、戦後65年以上経って未だ行政による学術的調査、研究、報告書の発行等は行われておらず、ましてや説明板一つ建てられていない。地下壕の地上部分の建造物、耐弾式堅穴抗は弥生式住居址に隣接しているが、弥生式住居址には慶応大学に

よって説明板が建てられているが、堅穴抗にはなにも説明板はない。ガイドの口頭の説明がなければ通り過ぎる人々には分からないというのが現状である。後世に歴史を伝える視点から、私はアメリカとの差を思わずにはいられない。文化庁は全国の戦争遺跡の所在調査を6年程前に行い、日吉台地下壕を含む全国51か所の戦争遺跡詳細調査の報告書を出す、出すと言って既に5年近く遅滞し、この3月にはようやく出るのではないかとと言うが、未だ発行されてはいない。アメリカから遅れること30年になんなんとする、この差は敗戦国と戦勝国の差なのか、文化的な違いなのか考えさせられる。

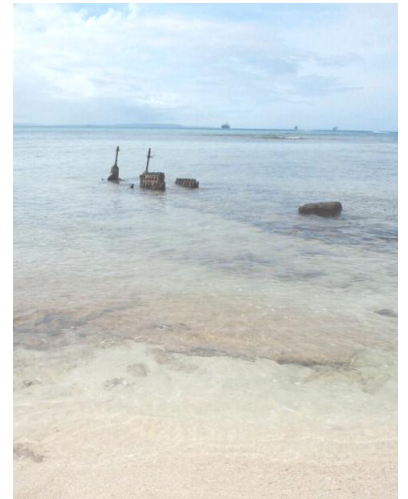
国外のアジア太平洋戦争の戦争遺跡にはすでに保存・調査・研究・説明板の設置など後世に伝える取り組みが行われているところがあるということが分かったことが私にとって今回の旅の大きな収穫であった。



砂糖を運んだ日本のSL



イズリー空港に残る日本軍戦車



海から突き出る機関砲



イズリー空港に残る海軍高角砲



イズリー空港の旧日本軍火薬庫跡



タポーチョ山山頂の説明板



山積みされた弾丸の薬莖



沖縄出身者の家屋(高床式)

資料

房総半島の戦争遺跡をめぐる バスツアー

本土決戦準備の戦跡から学ぶ

新井揆博

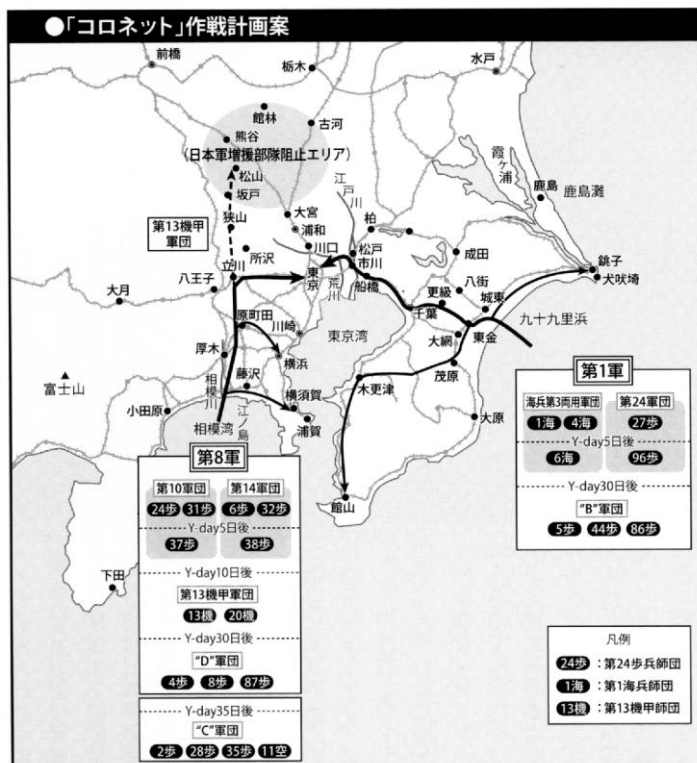
1 戦闘部隊は「汀線で玉砕」

多くの県民を巻き込んだ沖縄戦も 1945 年 6 月の段階で日本軍は敗れ、好むと好まざるとに関わらず本土決戦に追い込まれて行った。6 月 8 日、御前会議において「今後採るべき戦争指導の大綱」が決定された。その基本方針は、「飽くまで戦争を完遂し以って国体を護持し皇土を保衛し征戦目的の達成を期す」というものであった。

大本営は沖縄での敗北により、水際決戦・水際玉砕の構想へと向った。米軍を洋上で撃破するための戦力は、主として特攻機と水上・水中特攻兵器であった。7 月の段階で、陸軍は特攻機 2100 機と一般作戦機 1100 機を、海軍は＜桜花＞をふくむ特攻機約 3700 機と一般作戦機 1500 機を保有・配備したとされている。また海軍は九州と関東を中心に＜回天＞118 隻、＜蛟龍＞74 隻、＜海龍＞252 隻を配備するとともに各地に＜震洋＞を合計約 2900 隻、陸軍も＜〇レ艇＞合計約 2000 隻を配備することになっていた。

7 月 17 日には、第一総軍は、「第一総軍決号作戦計画」「第一総軍決戦綱領」を策定して、隷下の各方面軍に下達、それにもとづいて関東地区を担当する第十二方面軍はあらたな「決三号作戦計画」を 8 月 3 日に各軍に示した。この新作戦計画では、沿岸配備兵団の主陣地を汀線（波打ち際）を含む水際に変更し、九十九里浜での決戦を意図して内陸待機の＜決戦兵団＞第 36 軍を沿岸に移動することを命じている。上陸米軍に一撃を与え戦闘部隊は「汀線で玉砕」というものであった。一方大本営は、第一線部隊には後退を許さず、玉砕を強要しながら松代大本営への後退を進めた。（「幻でなかった本土決戦」 p 40-42）

2 米軍の意図…コロネット作戦



●「コロネット」作戦の太平洋陸軍動員計画表

兵員(人)		
Yデイ総計		54万2330
東軍 (九十九里浜)	地上戦闘	15万3782
	戦務	7万3177
	航空	1万4367
	合計	24万1326
西軍 (相模湾)	地上戦闘	20万3434
	戦務	8万8656
	航空	8914
	合計	30万1004
Yデイ30日後に投入される総計		39万7817
Yデイ35日後に投入される総計		7万4186
短期折り返し支援総計 (九州からYデイ15～30日)		8万1002
後方梯団総計		7万6311
コロネット作戦総計		117万1646

(出典：Staff Study Operations Coronet「参謀研究『コロネット』作戦」)

(歴史群像シリーズ⑧『太平洋戦争』) p 63

3 「護東兵団」の初年兵

大学生であった小松道男氏は三菱製鋼亀戸工場に勤労働員の日々を送っていたが、45年4月3日に赤紙がきて東部6部隊に入隊した。九九式短小銃、30年式短剣、軍衣袴（ぐんいこー軍服上下）、毛布、襦袢（じゅばんー下着）、袴下（こしたーズボン下）、編上靴（へんじょうかー軍靴）、水筒などを配布されて、護東22054部隊第二挺身中隊に配属された。そして、

4月13日に神奈川県中郡金目村井ノ口国民学校の宿舎に入った。

初年兵の訓練は、当初一週間ほど、大磯、小磯の海岸で行われた。銃剣術の刺突訓練を繰り返し、その後、大磯の砂浜でアメリカ軍のM戦車を想定し、四角い木の箱の5キロの模擬急造爆雷を背負って2台のM戦車に対する肉薄攻撃の訓練を受けた。海岸の砂の上の匍匐(ほふく)は、体が前へ進まず、辛く厳しかった。爆雷をM戦車のキャタピラが踏めば、戦車もろとも四散するだろう。そして教育係りの伍長勤務上等兵から、この海岸で挺身中隊の突撃する日は遠くないといわれていた。

初年兵訓練も切り上げられ、鷹取山陣地の構築作業についた。米軍の熾烈な艦砲射撃にも耐え抜き、米軍が二宮海岸に橋頭堡を築いても、江ノ島の洞穴からの砲火と海から反対斜面に築いた鷹取山の臼砲陣地から、24センチの巨弾を山越しに海岸に打ち込んで反撃、そこに夜間、切り込み挺身攻撃をかけて米軍を水際に追いつめようというものであった。なにかといえ「お前らの命は貰った」と、下士官、上等兵からいわれていた。自分たちは、最初の30分を支える水際のはりつけ部隊なのだという。

小松道男氏の当時の記録によると、

「6月8日 伐採に出て、雨降りとなり、帰って、一息一服していると、見つかって強烈なのを半田兵長からくらった。どうせ負けるなら、早いほうがよいという言葉は、今や兵隊仲間でよく聞かれる。

6月10日 腹をこわしている。連日13時間の労働。おそらく指で一突きすれば、ころりと倒れて起きられないのではないかと思う。睡眠は11時から4時がやっと、それに眠れない。

6月14日 また腹が下っている。おそらく高粱飯(こうりゃんめし)のせいだろう。…今日もしぼられた。坑木の松の幹がごつごつ肩にくいこんで、血がにじんだ。それで峠を息を切らして登った。投げ出したかったが、投げ出せなかった。俺はなんでこんなに苦しい目にあい、人一倍しぼられるのかと思った。」と率直に当時の手帳に記している。

(小松道男著『焼けないでくれた戦中日記』)

4 本土決戦の戦争遺跡

1)「桜花四三乙型」射出基地

45年3月ごろ、日本本土沿岸に近接しはじめた米軍艦船を攻撃するため、「人間爆弾」といわれた「桜花」を陸上基地からカタパルトで発射する簡単なジェット特攻機の生産が研究された。これを「桜花四三乙型」と称し、その射出基地及び射出、操縦の訓練場設置の計画が同時に進められた。訓練場(武山海兵団の飛行場*1)は7月下旬に完成したが、基地は完成にいたらず終戦になった。

45年7月14日海軍大臣は「桜花四三乙型基地建設整備の実施基準を示しその建設を訓令した。その訓令による装備場所、指定完成期日等は次のとおりであった。

装備場所	射出機	完成期	工事担当
地区別、地名	装備数	年月日	工作庁
関東地区			第一技術廠、横須賀施設部、横須賀工廠
熱海峠付近	8	45・8末	
房総半島南部*2	12	45・8末	
筑波山付近	6	45・9末	
武山付近	1	45・8末	
東海地区			横鎮 第一技術廠、横須賀施設部、横須賀工廠
大井付近	6	45・9末	
朝熊山付近	6	45・9末	
紀伊水道			阪警 第十一航空廠、大阪施設部、呉工廠
田辺付近	10	45・9末	

横鎮長官は右記の海軍大臣訓令を受けるに先立ち独自に装備場所適地を調査し5月22日に第20連空司令官に対し「桜花四三型」噴進射出装置、基地施設の構築実施を命令している。(戦史叢書『海軍軍戦備<2>』p188)

- * 1 横須賀第二飛行場(長井飛行場)と考えられる。現在滑走路が残る。
- * 2 房総南部三芳村上滝田・下滝田・吉沢・平群に特攻機「桜花四三乙型」12基の射出用カタパルト滑走路を建設

房総南部の配置

房総南部の抵抗拠点の中心の一つとして位置づけられた三芳村一帯は、「桜花」四三乙型と、打ち上げるための五式噴進射出装置(射出用カタパルト)の基地建設が命令された。この秘密特攻基地は、上滝田・下滝田・吉沢・平群四カ所に分散した基地形態をとり、12基のカタパルト式コンクリート滑走路を建設する計画であった。1基のカタパルトには5から10機の「桜花」を配置し、全体で50から60機が基地に配備される予定であったといわれる。(千葉県歴史教育協議会編『千葉県の戦争遺跡をあるく』国書刊行会)



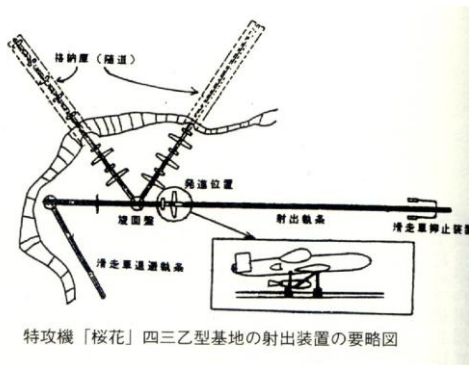
三芳村下滝田に残る「桜花」発射台



「桜花」の旋回盤



山に横穴を掘り格納庫にした



2) 第二横須賀航空隊(長井飛行場)

滑走路	30×1150m	コンクリート
滑走路	5×800m	コンクリート
運搬路		
誘導路		
掩体	有蓋 15ヶ	無蓋 60ヶ
指揮所	2ヶ所	
飛行機格納庫		
受信所	1棟	
送信所	2ヶ所	
自力発電所	1棟	
燃料庫	隧道式1ヶ所	
爆弾庫		
魚雷庫		

居住施設

木造12棟 隧道式1ヶ所

防衛省防衛研究所図書館調査(鈕持輝久氏)

滑走路はコンクリート製のものが2本あった。滑走路と滑走路の間は芝生。この芝生の部分は戦後返還され、石を片付けて4年ぐらい畑として使用したが、再度接収された。

経塚の東側に特攻のための線路があった。飛行機は芝生のところへ置かれ、格納庫はなかった。

第二横須賀航空隊(長井飛行場)



3) 特攻戦隊水上・水中部隊編成表(横須賀鎮守府管轄)

特攻戦隊	突撃隊	兵器	部隊番号	隻数	記 事
第一特攻戦隊 (横須賀)	第十一突撃隊 (油壺)	海龍	1・2・3	36隻	45年3月1日開隊 海龍練成基地
		回天	14	8隻	
		震洋	27・56	100隻	
	第十五突撃隊 (江ノ浦)	海龍	4・5	24隻	45年4月20日編成 5月1日開隊(江ノ浦)
		震洋	67・136	75隻	
	第十六突撃隊 (下田)	海龍	6	12隻	45年5月1日開隊 県立下田高等女学校内
		回天	13	10隻	
		震洋	51・57・137・140	150隻	
	第十八突撃隊 (勝山)	震洋	59	50隻	震洋45年6月25日配属 海龍隊45年7月25日配属 海龍8基 45年6月20日開隊
		海龍	11	12隻	
	横須賀突撃隊 (横須賀)	海龍	101・102・103	36隻	海龍基礎訓練基地 45年5月1日公開学校内
	第七十一突撃隊 (久里浜)	伏龍			伏龍練成基地

特攻戦隊	突撃隊	兵器	部隊番号	隻数	記 事
第七特攻戦隊 (小名浜)	十二突撃隊 (勝浦)	海龍	1 8	1 2 隻	
		回天	1 2	6 隻	
		震洋	5 5・5 8・6 8・1 2 9・1 3 5・1 3 9	2 2 5 隻	
	第十四突撃隊 (野の浜)	海龍	9	1 2 隻	4 5 年 4 月 2 0 日 内 令 第 3 4 2 号により編成 5 月 1 5 日 開 隊 横須賀水雷学校内
		震洋	1 4 6	2 5 隻	
	第十七突撃隊 (小名浜)	海龍	1 2	1 2 隻	4 5 年 4 月 2 0 日 横 須 賀 機 関 学 校 内 開 隊
		震洋	1 3 8・1 4 1	5 0 隻	
第四特攻戦隊 (鳥羽)	第十三突撃隊 (鳥羽)	回天	1 5	4 隻	4 5 年 4 月 1 5 日 開 隊 伊勢防備隊内
		震洋	6 0	5 0 隻	
	第十九突撃隊 (的矢)	海龍	7・8	2 4 隻	4 5 年 5 月 2 0 日
八丈島警備隊		回天	2	8 隻	
		震洋	1 6	5 0 隻	

戦史叢書『大本営海軍部・連合艦隊《7》』386-388・門奈鷹一郎『海軍伏龍特攻隊』p 239-240 を元に作成。

伏龍作戦

伏龍隊員は1945年7月中旬、久里浜沖で、日本本土に上陸してくるだろう米軍を迎撃する特攻訓練を行っていた。

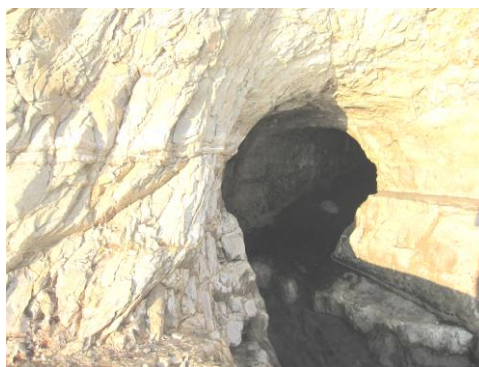
利用された潜水具は海軍工作学校で試作されたもので、逼迫（ひっぱく）する資材と戦況に対応するため、できる限り既成の軍需品を用いて製作された。粗末な工作の潜水兜を被り、背中に酸素ボンベ2本を背負い、清浄缶を背中に背負い、腹に鉛の錘、足には鉛を仕込んだワラジをはいた。潜水兜にはガラス窓がついているが、足下しか見えず視界は悪かった。2ヶ月の短期間で予科練習生徒に見合う3000セットが調達される予定であった。

伏龍の作戦では遊泳は考えられておらず、隊員は海底を歩いて移動することになっていた。ここの隊員は水中で方向を探る方法を持たないため、あらかじめ作戦正面に縄を張っておき、これをつたいながら沖合いに向かって展開する予定であった。海岸からの距離は縄の結び目の数で測られた。陸上との通信は不可能で、隣の隊員との連絡手段もなかった。海中にいったん展開すると、陣地変換はほとんど不可能であった。

稲村ヶ崎の伏龍基地



稲村ヶ崎の伏龍基地



現在も残る伏龍基地の入坑部

黒崎ノ鼻洞窟砲台



洞窟砲台正面



大砲の砲座あと



背後には弾薬庫などの部屋がある

海軍特攻機地



油壺の東京帝国大学臨海研究所を本部として第一特攻戦隊、第11突撃隊の基地がおかれた。



油壺の小網代湾側には舟艇の
棧橋が？残る



油壺公園には震洋と思われる
格納庫が残る。

帝国海軍の軍事力を支えた横須賀海軍工廠

造兵部・造船部・造機部・機雷実験部・光学実験部・航海実験部・電池実験部・通信実験部などの各製造部局をもち、海軍の軍事力を支えた。

1945年敗戦時の主要設備概数

土地	工廠構内	約110万平方メートル
建物	庁舎工場等総建坪	約30万㎡、延約40万㎡で大部分は鉄骨亜鉛ふきであった。
機械施設	工作機械・施設機械等	約10000台
人員		約87000人（1945年工廠終戦時）

戦争末期には、特攻兵器を製造

蛟龍	呉が主体でその他官民工場で製造（110隻完成）
海龍	横須賀が主体で製造（224隻完成）
回天	呉が主体となり、光・横須賀も参加（約400基完成）
震洋	横須賀（6200隻完成）
魚雷艇	横須賀・呉（大分）・佐世保・舞鶴（約1000隻）

（『横須賀海軍工廠外史』より）

その他の三浦半島における本土決戦陣地

地上砲台

花立台、観音崎、千代ヶ崎、剣崎、城ヶ崎、新宿、

洞窟砲台

鴨居、鳥ヶ崎、千駄ヶ崎、高貫、岩浦、浜諸磯、黒崎、佐島、長者ヶ崎、小坪

狙撃用洞窟陣地

馬堀、走水、久里浜海岸、浦賀、千駄ヶ崎、高貫、剣崎、浜諸磯、三戸海岸、黒埼、

長浜、小網代、城ヶ島

高角砲台

鷹取山、田浦、二子山、畠山、砲術学校、猿島、小原台、衣笠、大津、武山、荒崎、葉山、小坪、佐介山、野島浦、小柴崎、金澤山、朝比奈山

海軍特攻基地

油壺湾、小網代湾、江奈湾、稲村ヶ崎（伏龍基地）

トーチカ

観音崎その他

軍令部第三部（情報）の本土決戦にむけた対応

1945年6月はじめ、本土決戦に備えるため59名の予備士官が配属され対米情報課は113名の大所帯となった。7月下旬に、速成教育を受けたものの約半数と、それまで対米情報作業に当たっていた予備士官を合わせて48名が情報部の本土決戦配備の第一陣として次表に示すように配備についた。「叢雲隊（むらくもたい）」と名付け48名の予備士官は11班に区分されて鎮守府、警備府及び艦隊のおもな司令部に配属された。一つの班6名ないし3名で編成され、情報作業を一通り心得た大尉または中尉が班長となった。これら予備士官は、配属された司令部の情報参謀の下で、対米情報作業にあたるとともに、東京の情報部と密接な連絡をたもち、かつ敵がわが本土上陸に成功する場合に情報と諜報活動の基礎要員となることになっていた。

三浦半島の決戦陣地

派遣先	班の員数	班 長	班 員			
			大尉	主計大尉	中尉	少尉
横須賀鎮守府	5	中 尉			3	2
呉鎮守府	5	主計大尉		1	2	2
佐世保鎮守府	5	主計大尉		1	2	2
舞鶴鎮守府	6	主計大尉		1	2	3
大阪警備府	4	大 尉	1		1	2
海軍総隊	5	大 尉	1		2	2
第三航空艦隊	4	中 尉			1	2
第五航空艦隊	4	大 尉	1		1	2
第十航空艦隊	4	中 尉			2	2
合 計	48		3	3	19	23



実松 譲『日米情報戦記』図書出版社

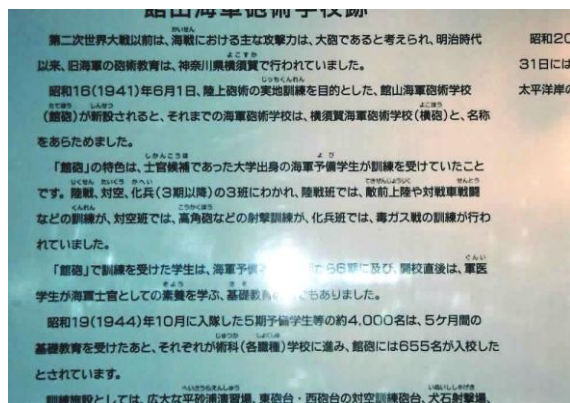
『三浦半島城郭史』（下）

寄稿

房総半島の戦跡をめぐるバスツアーに参加して

川崎市 T A 記

10月16(土)に日吉で行われた「横浜・川崎平和のための戦争展」で、いただいたパンフ「戦争遺跡をめぐる見学会のお誘い」の中に、「房総半島の戦争遺跡をめぐるバスツアー」があることを知り、そして場所が南房総と館山市の戦争遺跡とあったので、特別に参加させていただきました。特に館山市とあったので注目をひきました。ただ見学場所に館山の砲術学校跡が入っていなかったため、ここを見るように幹事の方、副会長さんにお願ひし、特別に入れていただきました。ご無理をお願ひし、コースの追加をしていただいたので、ご迷惑をお掛けしたのではないかと、深く反省しております。ただ館山を見るからには、館山海軍砲術学校跡を見ないと、本当の館山を見た事にならないのではないか、と思うからでした。これは新井先生もご存知のように館砲の存在を無視することはできないのです。横砲と館砲があるように、この存在は無視できないと思います。(※横砲＝横須賀海軍砲術学校 館砲＝館山海軍砲術学校)



館山海軍砲術学校跡説明板

私は数年かけて「父の足跡めぐり」をしています。理由は、父がどんな場所で、どんな仕事を、何のためにやっていたのかを知りたかったからです。実はこの館山海軍砲術学校だけがまだ見ていなかったのです。そこで今回のバスツアーがあるというので、特別にお願ひし見学地に入れていただいたのです。自分の要望がかなって、本当にうれしかったです。これで館山は、ほぼ全部見たことになると思います。なぜ館山海軍砲術学校に固執しているかというと、父がいたからです。

父の足跡巡りについてご紹介しますと、場所は広島県の江田島、横須賀、館山です。父は、運良く戦時中、戦地に赴くことなく、内地勤務で教育部隊に居りました関係で、戦死はまめがれました。我々子供3人共、出生場所が違っております。よくまあ戦争中・戦後のあわただしい中、三人の子供を育ててくれたと、今は両親特に母親に感謝するばかりです。‘親孝行したい時には親はなし’とよく言われるように、その母はもう居りません。母親からは「お前達、男二人はお父さんが戦地へ行かなかったから生まれてきたんだよ」といつも言われていました。今になって、あの時の母の言ったことが、よく解かるような気がします。我々子供は、姉と兄と私の三人兄弟で、下の二人は戦後生まれです。父は傷痍軍人で、終戦後復員業務に携わりましたが、今となっては亡き父です。

館山は房総半島の突端で、東京を守る要所となっていた所です。そこで父は本土防衛の任にあたっていた様です。また塹壕堀をしていたとの話でしたが、その壕はどこにあるのかも確かめなかったのです。赤山地下壕・掩体壕など色々ありますが、それらは館山航空隊所属の人が掘ったようですので、父が掘った場所はどこなのか、いまだにどの塹壕なのかは良く分かりません。館山航空基地は現在も航空自衛隊が使っており、そこに資料館もあります。館山海軍砲術学校はなくなっており、学校跡として残っているだけです。

今回のバスツアーでガイドの方に館砲の話をしたら、特に館砲三期生についてよくご存知で、NPOの方の研究熱心さに驚きました。やはり生き残りの人の話などをよく聞いて、現存するものを整合させて記述・記憶する事がいかに大切かを実感したものです。私の大学の恩師(90歳)の名前が館砲記念碑に刻まれているのには大変驚きでした。館砲跡に実際行って良かったと実感しています。

まだ「父の足跡巡り」で残している所があります。それは、父が建てた慰霊碑の一つです。父は沖縄とテニアン島の二箇所に慰霊碑を建てています。何のために建てたのかは、今もっ

で分かりませんが、沖縄は、姉が見て確認をしてくれています。テニアンに建てたものは、まだ見ていないのです。これを最後に見て、確認をする事が私の使命と思っております。今も思い出されるのは、母が富浦で歌った‘みかんの花咲く丘’です。法事の時には皆で、この歌を歌って亡き母を偲びます。また少年時代に家族みんなで食べた西洋料理です。これは今思うとナイフやフォークを使って食べる食事マナーを教えるためのものだったのでしょうか。

今後の対応ですが、現在も使われている所は資料館などとして残されていくでしょうし、文化財になっているものは、そのまま引き継がれるでしょう。ただ現在未使用のもの、例えば特攻機「桜花」発射台跡、記念碑のある地下壕など、これは歴史の教訓として、後世に残す事が必要なのではと実感しております。また色々な先輩諸氏の残した遺跡などを軽視することなく、大事に後世に伝え、引き継ぐ事こそが我々の使命であると考えます。それがひいては平和につながると私は考えます。如何でしょうか。今度のツアーでしみじみとそんなことを実感した次第です。色々と企画をしていただいた方々に感謝申し上げます。有難うございます。

寄稿

南房総・館山の戦跡めぐりに想う

運営委員(バス運転) 岡上そう

今回のバスツアーは千葉県館山を巡るコースでした。館山の戦争遺跡は数年前の全国大会以来で、当時の私は視力が悪い割には裸眼で日常を過ごしていたので、ビジュアル的にはかなりぼやけた印象でした。数年前から私はコンタクトレンズを着用するようになり、今回はどれだけそのビジュアルが鮮明に脳裏に焼きつくかが楽しみでした。中でも下滝田の斜面に遺るカタパルト跡がどう見えるのか、それが楽しみでした。



桜花発射台

下滝田の畑に造られたカタパルト跡。これは本土決戦に備え、ロケット推進有人特攻機「桜花43乙型」を飛ばす為の陸上カタパルトで、長さ約97メートル(いま見学出来る部分はその半分くらい)鋼鉄レールが敷かれてあったといひます。残っているのはコンクリートで出来ているカタパルトの土台部分で、レールを敷く際の枕木を固定する為の孔が開けられており、畑のなかに異様な光景として見る者に何かを訴えかけているように感じてなりませんでした。

特攻隊といえば「桜花」ですが、実際に特攻機として使用されたのは「桜花11型」といい、他にジェット推力の「桜花22型」や潜水艦カタパルトから発射される「桜花43甲型(設計のみ)」、そして陸上カタパルトから発射される「桜花43乙型」があり、これこそ、下滝田のカタパルトから本土決戦に備え発射される予定だった特攻兵器なのです。下滝田のカタパルト跡は、先端部にかけて緩やかに盛り土がされており、おそらくレールは空へ向け少し反っていたのでしょうか。

館山は本土決戦の玄関口として、海には潜水特攻兵器「震洋」「回天」が、陸には大砲、特攻機「桜花」が配備され、当時の青年達はいったいどのような気持ちでこの空を見ていたのか、空へと向かうレールの先に何が見えていたのか。非常に感慨深いものがあります。

よく戦争遺跡を見学していて、「これは実際に使われたものですか?」という質問を耳にします。人は実際使われた物の方に遺跡の価値を付けようとするように思いますが、私はその設備を造ろうと動いた時代や国の流れが、最大の歴史的価値だと思います。また、その遺跡が残っている、残されているということも価値の高いことだと思えます。そういう意味では、

今回の館山の戦争遺跡巡りは、60余年前の激動が現在の自分につかみかかってくるような、そんなリアリティーと衝撃を感じました。

そして忘れてはならない。戦争で犠牲になるのは兵士だけではない。いつも歴史の影におかれ、人の目に触れることの少ない女性の存在。軍神として奉られることもなく、ただ闇に葬られてきた歴史、と言っても過言ではないでしょう。従軍慰安婦の問題です。生きながらにして死の苦しみを強要させられ、戦地にて足手まといとなれば捨てられる。もうひとつの戦争がここにあるのです。「かにた婦人の村」の小高い山の頂上に静かに立つ碑があります。「噫（ああ） 従軍慰安婦」この場合の「ああ」は苦しみの叫び声を表す言葉としての意味があるそうです。元従軍慰安婦の告白から造られた石碑です。

全国的に「戦争遺跡」というとどうしても「物」に興味が行ってしまいがちですが、本当は形として残らない歴史にこそ、私たちの学ばねばならないものがあると感じるのです。

私には沢山の叫びが聞こえてきました。書物や映像だけでは感じることの出来ないリアリティーに満ちたイマジネーション満載のバスツアーだったと思います。参加された皆さんは、かなりハードなスケジュールに疲れた方もいらっしゃると思いますが、気持ちと内容が盛り沢山のツアー、これからも続けて行こうと思っています。



かにた婦人の村チャペル

連載

地下壕設備アレコレ

〈その2〉「電源」

山田 譲

福島原発事故では電源喪失が重大事故の引き金となってしまいましたが、海軍地下壕でも電源の確保は生命線です。地下壕で使う電気機器は電灯と通信機です。照明と通信なしでは地下司令部はまったく機能しません。

日吉の地下壕には3種類の電源がありました。外部電力、自家発電、バッテリーの3つです。通常は電力会社の電柱からひきこんだ外部電力を使います。しかしこれは停電したり空襲で架線が切れたりします。それでディーゼル発電機とバッテリーを設備していました。このディーゼル発電機は実は起動が簡単ではありません。起動するための補助動力が必要で、しかもそれを回してもなかなかエンジンがかかりません。それで24時間回しどおしだったそうです。そして最後の頼みはバッテリーです。これは自動車の鉛蓄電池式バッテリーと同じものです。今とちがうのは容器が合成樹脂でないこと位で、おそらくホウロウびきか陶器製です。

バッテリーは電池ですから直流です。また通信機の電源も直流です。ですから発電機も直流発電機だったとおもわれます。当時の軍艦は戦艦大和も直流電源でしたので、この軍艦用設備をそのまま使えばいいわけです。しかし外部電力は交流です。ですから交流を直流に変えなければいけません。そのための交直変換機がどこかに置かれていたはずですが、また電力会社の電気は電柱に乗っているトランスの所までは戦前は3300vの交流ですから、これを引き込んでくれば壕内に変圧器も必要です。壕内には用途のよくわからない「機械室」があり、床に何かをすえつける土台があります。この部屋がそのためのスペースだった可能性が高いようにおもいます。しかし今のところ、その裏づけになる文書も証言もありませんのでこれは私の推測です。

(参考文献 『三菱長船電気ものがたり』 慶應生協ニュース53号元電気長菅谷氏の話)

お知らせ

日吉の戦争遺跡ガイド養成講座からのお知らせ



渡辺賢二氏

会報 99 号に別紙添付でご案内しました「日吉の戦争遺跡ガイド養成講座」は、第 1 回の「日中戦争とは 日本近現代史を学ぶⅠ」（渡辺賢二先生）には 30 名の参加者がありました。第 2 回目の前日 3 月 11 日に東日本大震災が発生したため、第 2 回講座を急遽中止といたしました。11 日には日吉地区は停電となり、首都圏で 3 割の人が帰宅できなかったそうです。それでも 12 日は 4 名の方が来場されました。渡辺先生にお願いして「アジア太平洋戦争とは 日本近現代史を学ぶⅡ」は 5 月 14 日に変更いたしました。

又、日吉台地下壕は慶応義塾による内部調査・安全点検が終了するまで（5 月末）入坑を中止しています。ガイド講座は其々下記のように日程を変更いたしました。

4 月 16 日は予定どおりに実施し、12 名の参加者があり、新井先生のお話の後に暖かい春の午後キャンパスを歩き、主に人事局地下壕入坑部のフィールドワークを行いました。水槽？のような構造物など、新たな発見もありました。次回からの参加をお待ちしています。（☆は変更）

日吉の戦争遺跡ガイド養成講座

—日本近現代史を学ぶ—

講師 渡辺賢二氏（明治大学講師）

第 1 回 『日中戦争とは 日本近現代史を学ぶⅠ』

2011 年 2 月 12 日（土） 13:00~15:00 慶応義塾日吉キャンパス藤山記念館会議室

☆第 2 回 『アジア太平洋戦争とは 日本近現代史を学ぶⅡ』

2011 年 5 月 14 日（土） 13:00~15:00 慶応義塾日吉キャンパス藤山記念館会議室

第 3 回 4 月 16 日（土） 13:00~16:30 来往舎大会議室

日吉の戦争遺跡の特徴とガイドの心得Ⅰ 日吉キャンパス周辺の戦争遺跡見学

☆第 4 回 6 月 18 日（土） 13:00~16:30 慶応義塾日吉キャンパス藤山記念館会議室

日吉の戦争遺跡の特徴とガイドの心得Ⅱ 箕輪町周辺の戦争遺跡見学

☆第 5 回 未定 日吉台地下壕のガイド実践・質疑討論

お知らせ

2011 平和のための戦争展 in よこはま開催のお知らせ

今年も横浜のかながわ県民ホールで講演会・展示を実施いたします。日吉台地下壕保存の会は展示で参加しています。どうぞお出かけ下さい。

5 月 29 日（日） 13 時 30 分～16 時 30 分 2 階ホール

小山内美江子実行委員長・中学生の朗読劇・「横浜大空襲」の映像

対談 「新聞は横浜大空襲・戦争をどう伝えたか」

丸山重威氏（関東学院大学教授）・石川美邦氏（神奈川新聞記者）

6 月 5 日（日） 13 時 30 分～16 時

若者の報告

講演「昭和 20 年夏 僕は兵士だった～三国連太郎・水木しげる氏ら取材して～」

梯久美子氏（ノンフィクション作家）

展示 6 月 2 日（木）～5 日（日） 10 時～19 時 1 階展示場

主催 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会

お問い合わせ TEL 045-241-0005 FAX 045-241-4987

活動の記録

(2010年12月～2011年4月)

- 12/22 運営委員会 会報99号発送(慶応高校物理教室)
- 1/14 戦争遺跡保存全国ネットワーク第15回全国シンポジウム実行委員会
(慶応高校物理教室)
- 1/19 地下壕見学会 山内つづきの会 33名
- 1/22 定例見学会 29名
- 1/24 運営委員会(慶応高校物理教室)
- 1/28 地下壕見学会 うゑるびーサロン「路」 25名
- 2/4 地下壕見学会 ヒヨシエイジ(慶応大学生) 30名
- 2/12 日吉の戦争遺跡ガイド養成講座第1回「日中戦争とは 日本近代史を学ぶI」
講師 渡辺賢二氏(明治大学講師) 慶応義塾藤山記念館 30名
- 2/13 地下壕ガイド学習会(菊名フラット)
- 2/18 第15回全国シンポジウム実行委員会(慶応高校物理教室)
- 2/26 定例見学会 45名
- 3/3 「日吉・帝国海軍大地下壕」日吉台地下壕保存の会編
第2版第1刷平和文化発行
- 地下壕見学会 田園調布学園 高校3年生・保護者・先生 47名
- 3/7 地下壕見学会 下田町自治会文化部 45名
- 3/11 地下壕見学会 国立市役所平和ツアー 40名(見学会は12時30分終了
14時46分に東日本大震災が発生 国立の皆さんは無事帰着された由)
- 3/12 ☆第2回日吉の戦争遺跡ガイド養成講座を地震のため中止(5月14日に変更)
- 3/18 日吉台地下壕保存の会が「かながわボランティア活動奨励賞」を受賞。神奈川県庁知事応接室にて授賞式
- 3/26 第15回全国シンポジウム実行委員会・運営委員会(慶応高校物理教室)
- 3/27 地下壕ガイド学習会(菊名フラット)
- 4/12 平和のための戦争展 in よこはま 実行委員会(かながわ県民ホールセンター)
- 4/16 日吉の戦争遺跡ガイド養成講座 慶応大学来往舎会議室・フィールドワーク 12名
- 予定
- 4/22 運営委員会 会報100号発送(慶応高校物理教室)
- ☆ 地下壕見学会は東日本大震災の影響で5月末まで中止しています。現在慶応義塾による地下壕内部調査が行われています。お問い合わせは見学会窓口まで。

☆地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで TEL045-562-0443(喜田 午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町 2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上
発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会